

氏名・(本籍)	佐藤晃太郎 (秋田県)
専攻分野の名称	博士 (保健学)
学位記番号	医博甲第14号
学位授与の日付	平成27年3月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科専攻	医学系研究科 (保健学専攻)
学位論文題名	作業の関連性を評価する尺度の開発
論文審査委員	(主査) 教授 石川隆志 (副査) 教授 湯浅孝男 教授 新山喜嗣

論文内容の要旨

はじめに

少子高齢化や晩婚化などの社会の変化の中で、私たちの生活は多様化しており、対象者の生活状況や考え方を把握することは容易ではない。

わが国の作業療法（以下、OT）では、「意味のある作業・生活行為の関連性が健康状態に影響を与える」という考え方があり、対象者の生活に焦点を当てた重要な作業・生活行為への支援が推進されている。しかし、その重要な作業・生活行為の状況やその関連性を把握するのは難しく、そのための評価尺度はない。

このような中で、対象者の作業・生活行為の関連性の状態を明らかにする手立てを開発することは有用であり、より効果的なOT支援に繋がるものと考えます。

研究の内容

1. 研究の目的

作業の関連性を質と量の両面から評価することができる「作業の関連性を評価する尺度」を開発することである。

2. 研究の流れ

原案を作成し、その後は妥当性や信頼性の検討、各種分析を行い、内容も収斂していく。最終的にコンセンサスが得られたものを「作業の関連性を評価する尺度」とすることとした。

なお、倫理委員会の承認を得て、十分な倫理的配慮のもとで実施した。

3. 方法と結果

手続き 1. 原案の作成

Personal Projects とは、課題や目標に向かって作業がいかに関連しているかという目標指向的なもので、マトリクスにより作業の影響度を測定するものであり、原案の作成に際し参考にした。現状の生活で作業がいかに関連しているかを質と量の両面から評価するということを基本に作成した。

完成した原案は、近年のわが国の OT の考え方を基盤とし、対象者の生活状況および重要な作業・生活行為に着目するものとなった。また、「作業の関連性」を「有意味で重要な生活行為の相互の因果関係」と捉え、その関連を質的、量的に把握することを基本概念とした。

手続き 2. 内容的妥当性の検討

1) consensus method

nominal group technique (以下, NGT) と Delphi 法を組み合わせた consensus method を設計した。NGT 後に反復アンケートを実施し、収斂を繰り返しながらコンセンサスを得ていくこととした。

2) 対象

臨床経験10年以上の作業療法士10名とし、同意が得られた者の中から専門領域に偏りがないよう配慮してランダムに選出した。

3) 方法

研究参加者に原案を郵送で配布し、検討項目（概念・構成、教示文、説明文、回答・考え方の例、注意書）の同意判定を9段階（1～3：非同意、4～6：どちらでもない、7～9：同意）でももらい、その根拠の記載を求めた。回収後に修正案を作成し、NGT を実施した。NGT では、各検討項目の解釈や文言の適切度について議論した。意見の発散と収束を繰り返し、内容が収斂し、再び同意判定をしてもらった。その後再修正案を作成し、それ以降は郵送での反復アンケートにより内容の収斂と同意判定をしてもらった。

4) データ分析

検討項目の同意の程度の中央値、四分位範囲、同意率を段階別に算出した。コンセンサス判定基準は同意率80%以上とした。

5) 結果

NGT, Delphi 法を通して内容は収斂され、各検討項目でコンセンサス基準を満たした。

手続き 3. 表面的妥当性の検討

1) 対象

学生25名とした。

2) 方法

Delphi 法（反復アンケート）により，原案の教示文，説明文と回答・考え方の例の理解度，評定の可否について同意判定をしてもらい，その根拠の記載も求めた。同意判定の基準は，手続き 2 と同様とした。

3) データ分析

手続き 2 と同様とした。

4) 結果

内容は収斂され，各検討項目で高いコンセンサスが得られた。手続き 2，3 により，評価尺度の修正版（以下，修正版）が完成された。

手続き 4．評価尺度の意義の分析

1) 対象

学生および一般成人80名とした。

2) 方法

修正版を実施してもらい，意見を聴取した。評価尺度の意義に関する意見をラベル化し，カテゴリー化した。そして，親近性のあるカテゴリーをまとめ，カテゴリー名をつけた。検討は利害関係のない作業療法士 3 名が行った。

3) 結果

重要な生活行為の把握，生活の振り返り，生活の考え方への気づき，生活状況の理解，生活改善へのきっかけの 5 つにカテゴリー化された。

手続き 5．量的な評価結果の意味の分析

1) 対象

学生および一般成人159名とした。

2) 方法

修正版と MOS 36-Item Short-Form Health Survey version 2（以下，SF-36）を実施した。

3) データ分析

修正版の結果から，総合点，プラスの合計点，マイナスの合計点のスコアを算出し，SF-36の下位尺度との関係性を Spearman の順位相関係数により検討した。有意水準は危険率 5 %とした。

4) 結果

修正版と SF-36に相関関係はなかった。

手続き 6．検査再検査信頼性の検討

1) 対象

手続き 5 と同様の者とした。

2) 方法

修正版を1～2週間の間隔で計2回実施した。

3) データ分析

挙げられた有意味で重要な生活行為の項目、各スコアの一致の程度を Spearman の順位相関係数により検討した。有意水準は危険率5%とした。

4) 結果

回収されたデータは133 (回収率83.64%) だった。挙げられた有意味で重要な生活行為の項目の一致の程度は、 $8.15 \pm 1.48/10$ だった。各スコアの相関係数は、それぞれ0.768 ($p < 0.01$), 0.794 ($p < 0.01$), 0.784 ($p < 0.01$) だった。

手続き7. 最終的な内容的妥当性の検討

1) 対象

手続き2と同様の者とした。

2) 方法

手続き4～6の結果をもとに、評価尺度の再修正版 (以下、再修正版) を作成した。手続き2と同様の検討項目、基準のもとで郵送により同意判定をしてもらった。

3) データ分析

手続き2と同様とした。

4) 結果

各検討項目でコンセンサス基準を満たした。再修正版を「作業の関連性を評価する尺度」とした。

考 察

2つの consensus method を組み合わせたことで、質的に高い妥当性を担保することができた。また、収斂を繰り返していく中で「個々人の意見の集合体」として本評価尺度が完成した。

本評価尺度は手法こそ Personal Projects と類似しているが、新たな概念の評価尺度である。Personal Projects は「現在とこれから」の生活に視点を置いているが、本評価尺度は「現在」の生活に視点を置いている。外的期待 (義務) と内的期待 (願望) という点では、Personal Projects はこれからの生活の願望的な生活行為に着目しているが、本評価尺度は現在の生活の義務・願望的な生活行為に着目していると考えられる。

また、各種検討・分析を通して、単に評価尺度というだけでなく、自己洞察や行動変容といった対象者自身にも有意味であり、生活を再構築する OT 支援になりうるという可能性が示唆された。一方で、SF-36との関連はなく、「作業の関連性」とは、OT の専門的な複合概念であり、複数の要素と複雑に関連し合う概念であることが示唆された。このような点から、スコアだけが独り歩きしてはいけ

ない評価尺度であり、対象者の変化を質と量の両面から相対的にみていくように活用すべきと考える。

しかし、臨床的活用がなされておらず、介護予防等での活用を見据えたデータの蓄積が大きな課題である。

ま と め

原案作成、各種検討・分析を通して、作業（有意味で重要な生活行為）の関連性を質と量の両面から評価することができる「作業の関連性を評価する尺度」を作成した。質的に高いコンセンサスがあり、臨床的意義は大きい。また、OT 支援ツールともなりうる可能性があるが、データの蓄積が大きな課題である。

引 用 文 献

- 1) Christiansen, C.H.: Three Perspectives on Balance in Occupation. 作業科学 - 作業的存在としての人間の研究 - . Ruth Zemke, Florence Clark (佐藤剛 監訳), 三輪書店, 東京, 1999, pp473-493.
- 2) Pope C. Mays N 瞬 (大滝純司 訳): 質的研究実践ガイド - 保健・医療サービス向上のために - 第 2 版, 医学書院, 東京, 2008, pp121-129.

論文審査結果の要旨

本論文は、作業療法の対象者にとって重要な作業（生活行為）に焦点を当てた支援を実現するために、作業の関連性を質と量の両面から評価することができる評価尺度を開発し、その妥当性と信頼性を検討したものである。本研究の斬新さ、重要性、研究方法の正確性、文章の簡潔明瞭性は以下の通りである。

1) 斬新さ

作業に関連する数多くの評価尺度の中で、これまで作業の関連性について評価する尺度はなかった。本尺度は対象者との協業を通じて、作業の関連性について質と量の両面から評価する目的で開発されたものであり斬新である。

2) 重要性

本尺度は、開発段階における活用においても有用性が確認されており、対象者個々のニーズに基づく介入計画を立案し、生活支援をするための評価尺度として臨床における活用が多いに期待されるものである。

3) 研究方法の正確性

本尺度はその目的を達成するために、7段階にわたる手続きを踏んで開発され信頼性と妥当性を検討したものである。各段階におけるデータ処理と解析は適切かつ正確に行われており、研究協力者に対する倫理的配慮も適切であった。

4) 文章の簡潔明瞭性

本論文は、評価尺度開発に至る手続きとその結果を研究の目的に即して解析し、結果と考察について簡潔明瞭に記載されている。以上より、本論文は博士の学位論文として十分価値あるものとして評価された。